
「幼なじみ」

ぴよこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「幼なじみ」

【Nコード】

N3881Z

【作者名】

ぴよこ

【あらすじ】

「…逃げてみるか？」

肩越しに見える天井の色と、色素の薄い髪の色がやけに美しいコントラストを描く。見慣れた彼の部屋、…ベッドの上。そう言って、綺麗な顔が笑った。

「幼なじみ」の紗衣さえと宥斗ゆうと。ある夜をきっかけに、ふたりの関係は変化していく。このままずっと、傍にいられる…？

No. 1 (前書き)

初投稿です。

ベッタベタの王道ストーリー。

行き当たりばったり。8割方話は書けていますが、最初のプロットと全く違う展開になったりしていて、ビックリですw

少しずつでも、なるべく期間を開けずに投稿していきたいと思います。12月中には完結させたいです。

よろしく願います。

No. 1

「…逃げてみるか？」

肩越しに見える天井の色と、
色素の薄い髪の色がやけに美しいコントラストを描く。

見慣れた彼の部屋、
…ベッドの上。

そう言って、
綺麗な顔が笑った。

私達は、お互い出会いの頃を覚えていない。
そんな事は、思い出せないくらいずっと昔の記憶なのだ。

産まれた時からいつも一緒。
私にも宥斗にも兄がいるが、年が離れているため、小さい頃は常に宥斗と行動を共にしていた。

私が母のお腹にいるところに新築で家を建て、先にこの家に住んでいたところ、2ヶ月あけて隣に越してきたのが宥斗達家族だった。

上の兄同士も同い年、下のお腹の赤ちゃんも同い年、しかも予定日まで同じ、とくれば、母親達はすぐに意気投合したようだ。

現に、今でも大の仲良しでしょちゅう父親たちを置いてショッピングだの、旅行だの、ふたりで出かけ回っている。

お互い両親が共働きなので、私が高校生になった頃、両家の夕食の準備を買って出た。

最初は「大変だろうから、やらなくていいよ」と諭されていたが、始めたことはなかなか辞められない性分なのを両親とにもよく分かっている、今では毎日の日課となっている。

母親の仕事が終わるのが早い日や、休みの日などはちゃんと作ってくれるし、品数は一緒なのだから量が多いだけで、食事の準備は全く苦じゃない。

料理は小さい頃から大好きだ。

それを夕飯時になると宥斗の家に届けに行く。

兄たちはとくに家を出て自活しているので、ふたりで夕飯を食べ

る。

宥斗が後片付けをしてくれて、後はテレビを見たり、宥斗の部屋でゲームをしたりして一緒に過ごす。

進路も決まった高校3年の冬、バイトも部活もしていない私たちは、お互い友達との予定がない限り、夜はふたりで過ごしていた。

いつもと同じ、夜のはずだった。

No. 2

「紗衣！ちゃんとタイミング合わせろよ！」

「あ、合わせてるよ！あれっ!？」

その日の夜は、このところハマっているゲームをしていた。

ふたりで協力しながら先に進んでいかなきゃいけない、迷路のゲーム。

対戦ものだと宥斗のひとり勝ちになってつまらない、と言ったら宥斗が買ってきてくれたゲームだった。

「あゝゝ!!！」

私が叫び声をあげて、ゲームオーバー。

「やっぱ紗衣には難しかったか…。もっと簡単なやつじゃねえとダメだな」

「まだ慣れてないだけだもん!!！」
ムキになって言い返せば、宥斗は優しく笑う。

ドキンッ

顔が赤くなる前に、急いで言葉を紡ぐ。

「もう一回!!」

「おーし。早く慣れろよな」

最近の宥斗はこんな風に優しく微笑むことが多くなった。

思春期特有の、仲がいいとからかわれる、なんて時期もとうに過ぎた。今では学校中の人が、私達の間係を知っている。

ふたりでいると、付き合っているのかと質問されることもよくあったけれど、私達はいつも同じ返答をしていた。

「幼なじみ」だと。

宥斗は中性的な顔立ちをしていて、手足がものすごい長い。

身体のバランスがいいからか、175センチくらいしかないはずの身長はもっと高く見える。

小さい頃から綺麗な顔をしていたけど、高校生になった頃から男らしさも加わって、女の子に声を掛けられることも増えた。

けれど、女の子に対しての愛想をお母さんのお腹の中に起き忘れてきてしまったのか、応対がそっけなくて、そこがまた競争率をあげる原因となっているらしい。

毎日登下校を共にしている私も、入学当初、嫌がらせを受けたこと

もあったけれど、友達と宥斗が一喝してくれて、それ以来あからさまな攻撃は受けていない。

でも、「幼なじみ」だから、隣にすることを許されたような気がして、なんだか変な気分だった。

その時、自分は宥斗のことが好きなんだと気付いた。

「幼なじみ」じゃなくて、「彼女」として宥斗の隣にいたい。

宥斗にも、私のことを「女」として見て欲しい。

友達には告白するようにすすめられるけど、失敗して、「幼なじみ」としてすら宥斗といられなくなるのはイヤで、なかなか踏み出せない。

この関係を崩すのが怖い。

でも、やっぱり好き。

宥斗の優しい笑顔を見るたびに、たまらなく胸が苦しくなる。

「うわ、もうゲームはじめて2時間もたつよ」

「あー喉乾いたなあ。紗衣も何か飲む？」

「飲むー」

なんか持ってくる、と宥斗が部屋を出て行く。

時刻は午後10時。

そろそろ帰ろう、と思いながらゲームを片付けていると宥斗が戻ってくる。

「早くない？」

「俺、紗衣と違って足長いから」

笑いながら片足を上げて、足首をひらひらさせながら言う。

冗談だろうけど、事実なのがムカつく。

「いただきますーす」

「無視かよ」

ベッドに座って、宥斗の持ってきた缶ジュースを飲む。

甘い。

ジュースを飲み始めた私を見て、ベッドの横にある勉強机の椅子に宥斗も座る。

「あ」

「なんだよ」

「そういえば、みのりがね、日曜日に、みのりの彼氏と、その友達と、あと女の子何人かでカラオケに行くらしいんだけど。今日誘われたんだ」

「ふーん…」

机に頬ずえをついて、宥斗がこちらを見る。

ん？機嫌悪い？

「で？」

「え？」

「行くの？」

あからさまに、イヤそうな声。

何年一緒にいても、宥斗の怒った顔は怖い。

怒っている理由がわからないので、そのぶん余計に怖く感じた。

「うーん、まだ決めてないけど、みのりがもし参加するなら、宥斗の許可とってからにしろって言うから」

内心怯えているのを、極力顔にださないように心掛けて答える。

親友であるみのりに誘われた時、「絶対に宥斗の許可を取るように」

と念をおされた。

別に男の子とふたりだけで出かけるわけでもないし、付き合ってるわけじゃないんだから、聞く必要もないと思ったが、みのりにしつこく言われたので、一応話してみた。

：言わなきゃよかったかな。

「それ合コンだろ？」

言って、持っていたジュースを飲み干しす。それから乱暴に左耳を掻いた。

ああ、イライラしてる。

宥斗はイライラすると耳に触る癖がある。

：て

え!?

「え!?! 合コンなの!?!」

あまりにもびっくりして、持っていたジュースを落としそうになった。

危ない、危ない。

「顔も知らない男と女が何人かずつで集まったら、そりゃ立派な合コンだろ」

呆れたような声で言われてから、その法則はいかなものかと思っ
たが、黙っておく。

「あゝなるほど…。」

「なんで気づかねえんだよ。紗衣はホントにアホだな」

「アホって!! だってみのり、合コンなんて言わなかったもん!!
だいたい宥斗だって、女の子交えて出かけたことくらいあるでし
ょ!？」

話してて、自分でもよくわけがわからなくなってきた。

なんでこんなことで言い合いしてるんだ。

でも、宥斗だって女の子を交えた大人数で出かけてるのに、なんで
自分だけアホ呼ばわりされなきゃいけないの。

それだって、宥斗の言う法則で言ったら合コンじゃない!!

「俺のは合コンじゃないだろ。最初からわかってたら行かないし。
まあ明らかそれっぽくなった時は、さっさと帰ってくる」

宥斗が飲み終えたジュースをゴミ箱に投げる。

ナイツシュー♪

って違う!!!!!!

「私だって、明らかそれっぽくなったらさすがにわかるもん！」
「いやいや。紗衣は誘われてるのにも気付かないまま付いていくだろ」

「…っ！もしそうなくても、さっさと帰ってくればいいんでしょ！」
「？」

もう売り言葉に買い言葉だ。

私はベッドにある枕を、宥斗めがけて投げつける。

「…できんの？」

うまいこと片手で枕を受け止めた宥斗が、近年稀に見る怖い顔でつぶやく。

馬鹿にして…！！

「できるよ！！」

瞬間、宥斗が勢いよく椅子から立ち上がる。

え、と思っているヒマもなく、両手首を掴まれると、視界が突然動いた。
ベッドに背をつくると、ぼふっと、なんとも間拔けな効果音が響き渡る。

そのままベッドに縫い付けるように手首に力をこめられた。

気が付くと、宥斗の肩ごしに天井を見上げていた。

No. 3

「紗衣」

私を呼ぶ、声がする。

こんな風に、宥斗に呼ばれたことなんてない。

握られている手首が、かすかに痛む。

「…逃げてみるか？」

真っ直ぐ私を見下ろす宥斗が不適に笑った。

一瞬のうちに、自分の顔が真っ赤に染まっていくのがわかった。

目も、こんなに見開いたの初めてじゃないだろうか。

この目は私の目で、これは私に起こった現実の出来事なのに、まるで映画をみているような不思議な感覚だった。

何も言えずに固まっていると、ふっと、いつもの優しい笑みを浮かべた顔がどんどん近付いてくる。

まばたきさえも忘れた私は、人形のように固まってその様子を見ていた。

唇が触れ合うかと思うほどに近付いて、宥斗は一度動き止める。

ああ、やっぱり宥斗は、なんて綺麗な顔をしているんだろう。

なんて、その場で考えるにふさわしくない事を考えてから、はっと我にかえる。

え!?

お、おお押し倒されてるう〜〜!?

声にならない驚きで口をパクパクさせると、それを見ていた宥斗が吹き出した。

「ぶはっ」

そのまま顔を私の右側によけて、宥斗もベッドに倒れこむ。

手はまだ、掴まれたままだった。

顔をベッドにふせたまま、笑いの止まらない宥斗に呆然とする。

しばらく笑って気が済んだのか、手がほどかれ、向き合うように体を引っ張られる。

ゴロンっと転がると、綺麗な顔が目の前にあって、驚いて体を離そうとすると、今度は宥斗の右手に肩を引き寄せられて、すっぽりと覆われる。

近い〜!!

近いって〜!!!!!!

状況についていけないアワアワした私を見て、もう一度微笑むと、

そのあと、切なく顔をしかめて言った。

「俺の、目の届く範囲にいてくれよ…」

そのまま頭を下げて私の視界はふさがれる。

「うん…」

それ以外の答えを、私は持ち合わせていなかった。

No. 4

日曜日。

昨日の夜はなかなか眠れなかったのに、もう目が覚めてしまった。

まだ空の色が薄暗いことから平日の起床時間よりも、はるかに早いことがわかる。

「まだ5時半か…」

ベッドの枕元にある目覚まし時計を見て呟く。

あのあと、どうやって自分の家に帰ってきたか、覚えていない。

気が付いたら自分の部屋にいて、ベッドの上だった。

何度も何度も、あの時の、切なく微笑む宥斗の顔が脳内を巡る。

それだけでまた顔が真っ赤に染まっていくのがわかって、キツく目を閉じた。

まだお風呂に入っていないし、みのりに断りの電話もいれていない。両親は出張で月曜日の夜まで帰らないそうなので、ダイニングに出しっぱなしの料理も冷蔵庫にしまわなくちゃいけない。

わかっているのに、宥斗のことを考えると、その他の全ての思考が停止してしまう。

目の届く範囲にいろって、どういう意味？

それは「幼なじみ」として？

それとも…？

意識を覚醒させてくれたのは、他でもない、宥斗からの電話だった。

『もしもし』

「も、もしもし…ッ」

『悪い、寝てた？』

「え？」

慌てて目覚まし時計を振り返ると、時刻は午前1時。

何時間ボーっとしてたんだわたしは…！！

『また明日かけるわ』

「宥斗！寝てない！！起きてたっ！」

電話を切ろうとする宥斗に慌てて口を挟む。

『そうか』

「うん…」

妙な沈黙やめてよ！

もう、心臓の様子がおかしい！！

ありえない早さで打ってる！！

『紗衣、日曜日は、合コン行かない？』

「行かないよ！！」

行くなと言ったのは自分なのに、なんでそんなこと聞くんだろう。携帯をもつ手に力がこもる。

『じゃあ…さ。映画見に行かねえ？』

「映画？」

『うん。この前テレビでCMやってたやつ。お前、見たいって言うてたでしょ？』

「ああ…よく覚えてるね」

『紗衣と違って、頭もいいもので』

笑いながら言う、いつもと同じ調子の宥斗にほっとする。

気まづくなるのは、イヤだったから。

「はいはい」

『ははっ。でさ、日曜日から公開なんだと。だから…』

「行く!!」

『即答かよ』

嬉しそうな声を聞いて、胸が千切れそうな程にキュンとなった。

どうしよう。

宥斗が好きだ。大好きだ。

もう何年も前に気づいたことを、改めて確認する。

まだ「幼なじみ」でもいい。

傍に、いたい。

『じゃあ11時な。外出てろよ』

「うん! わかった」

『じゃあ日曜日に。遅くにごめん』

「ううん、おやすみ」

電話を切ってから、久しぶりの宥斗との外出へのワクワク感でなかなか眠れなかった。

そのままのテンションで過ごした土曜日はすさまじかった。

着ていく洋服を選んだり、髪型を決めたり、久々にマニキュアを塗ってみたりした。

自分の浮かれっぷりに途中で気付いたけど、楽しみなものは楽しみだから仕方ない。

そして、今日もこうしてとんでもなく早くから起きている。

もう寝れないし…洗濯して掃除しちゃう。

今日はいい1日になるといいな。

そう思いながら、ベッドから抜け出した。

N o. 5 (前書き)

今さらながら、行間が開きすぎて読みづらいですね……。次回小説を書く時は、もっと詰めて書くことにします…。

No. 5

玄関に備えついている、大きな鏡を前に、お出掛け前の最終チェックをする。

チェックのプリーツミニスカートに、白いショートコート。

足元は茶色のニーハイブーツ。

いつもは下ろしてる髪の毛も、ハーフアップにして、毛先だけコテで巻いた。

メイクは学校にも薄くしていつているが、今日はアイシャドウをキラキラ輝くラメの入ったものにして、初めてつけまつけを付けてみた。

つけまつけには苦手意識があったけど、みのりに教えてもらったこのまつけはとても自然で、よっぽど近付いて見ないと、つけまつけと分らない。

マスカラを塗るより時間がかからないし、濃くないのに目が大きくみえる。

服装も、髪も、メイクもうまくいった。

それだけで、なんだかすごく嬉しくなる。

この自己満足感は、女の子特有のものだろうなあ…。

携帯で時計を確認すれば、時刻は10時50分。
待ち合わせの10分前だった。

「いってきまーす」

誰もいない我が家に挨拶をして、玄関の扉を開ける。

そのまま門の外まで出てみるが、宥斗はまだ来ていなかった。

ドキドキする心臓を落ち着かせるために、ひとつ深呼吸をすると、
吐息が白く変わった。

12月も半ば、寒さが身にしみる季節になってきた。

平日は基本的にいつも一緒にいるのに、あの夜のこともあったせい
か、待ち合わせ（家の前だけど）して出掛けるということに異常に
緊張する。

あの夜からまだ2日。

2日間、ひたすらぐるぐる宥斗のことばかりを考えていた。

私を束縛するかのような、宥斗の言葉が嬉しかった。

それが、「幼なじみ」としてなのか、違う何かなのかはわからない。

だんだん冷静になった頭で考えれば、心配性な宥斗の事だ。

ベッドに押し倒したのだって、意地っ張りな私への、ある意味「警告」のようなものだったのかもしれない。

だけど、言葉の意味も行動の意味も、どうしても良くなる程に、嬉しかったのだ。

「女」としてじゃないかもしれないけど、目の届く範囲にいろと言われた。求められたその事実が、悲しいかな、私の恋心を刺激する。告白して、振られて、傍にいらなくなるくらいなら。「幼なじみ」でもいい。

永遠に失うよりはずっといい。

携帯でもう一度時間を確認すると、11時を過ぎたところだった。

そろそろ来るかな、と、宥斗の家の方に目線を向ければ、ちょうど玄関から宥斗が出てくるところだった。

門の外まで出てきて私を見つけると、ギュッと眉を寄せ、少し離れた距離でそのまま立ち止まっている。

何やってるんだろう…。

「宥斗？」

小走りで近寄ると、視線をチラッと私の顔に向けてから、足元へとうつした。

「紗衣、まさかその格好で合コン行くつもりだった？」

「え?...変かな？」

みのり達と出掛けることを決めていたわけではないので、もちろん答えはNOだけど、まさか今日のために1人ファッションショーを催したことは知られたくない。

変だったかなあ...

少し落ち込みながら宥斗を見上げれば、寄せられた眉はまだ戻っていないかった。

「スカート、短すぎるだろ」

言いながら、チェックのミニスカートを引っ張られる。

「ちよつと!!めくらないでよ!!」

慌ててスカートを手で抑えると、宥斗が手を離す。

「そんな短いので行ったら、男共のやる気に火がつくだけだろうが。」

いやいやいやいや。

だからこの間からその勝手極まりない法則はなんなんですか。というか、あなたのやる気には火はつきませんか。

スカートめくりって小学生か！

やっぱり女としてなんか見てないでしょ！

心の中でツツこみをいれて、最後の一文に自分でがつくりする。

私の判断は正しいと、再度思い知らされた。

「制服のスカートとそんなに変わらないでしょ！」

「制服より短いだろ。お前見てくれだけはそれなりにいいんだから、自覚しろよな」

「誰も私のことなんか見てないもん！！だって何よだけって！」

「中身伴ってないからな」

「宥斗！！」

「中身伴ってないからな」

「2回言うなあ！！」

はあはあ…っ。

出だしからこれ！？先が思いやられるわ！！

がなりすぎて息切れしてる自分に疲れながらも、このやりとりすら楽しい。

ふと目線を上げると、私と同じく楽しかったらしい、笑顔の宥斗の姿が目にはいる。

黒いライダースジャケットに同じ色のマフラーを巻いて、デニムにショートブーツを履いている。

デニムはよく見るとケミカルウォッシュだ。

無駄に長い足が引き立つ。

「行くか」

「…うん」

宥斗が歩きだす。

指摘された途端に気になってきたスカートの裾を押さえながら、私もそれに続いた。

No. 6

映画の上映は2時からなので、その前にどこかでお昼ご飯を食べよう、という話になった。

私達の家から駅まで徒歩15分。

駅前にも小さな映画館があるけど、最近5つ程離れた駅に新しい映画館ができたらしい。

まだ行ったこともないどころか、その存在すら知らなかった私が驚いていると、せっかくだからそっちに行ってみるかと言ふので、電車に乗って移動する。

宥斗は既に、友達と何度か行ったことがあるらしい。

私がいつも友達と出掛けるのは、たいてい反対方面なので、その駅に行くのは久しぶりだった。

駅から直結した巨大なショッピングモール。洋服や雑貨のショップやフードコートの立ち並ぶ中にその映画館はあった。

先にチケットを買うために、映画館に入ってまた驚いた。まるで遊園地のアトラクションのような館内。チケットも、券売機で買えるという。

売りに並んで、店員さんからチケットを受け取る、という従来の方法しか知らない私には衝撃だった。座席が自分で選べるのも便利だ。

作品名言うのってなかなか恥ずかしいもんねえ…。

「あゝもうけっこう埋まってんなあ」

宥斗が券売機の画面をタッチしながら操作する。

私達が見たい映画は、今日封切りとだけあって、見やすい席はどこも埋まっていた。

「おっ！ここ開いてるじゃん。けっこう後ろだけど紗衣、いい？」

「どこでもいいけど…ん？この席カップルシートって書いてあるよ。これ何？」

「間の手すりがない席のこと」

「実にざっくりした説明ありがとう…」

「ふたつの席が繋がってて…なんかソファーみたいになってんだよ」

「へ〜…。いいよ。見えるならどこでも」

言うど、宥斗はまた画面を操作して、お金を入れる。

「いくら？」

「いいよ。お前はそのままった金でもっと丈の長いスカートを買え」

「なにそれ…合コンなんて行かないもん！！」

「合コンじゃなくても短かすぎるだろ」

「はぁ…。いつからそんなおとんみたいな事言うようになったわけ？」

「よし。飯食いに行くか」

私の質問を華麗に無視すると、ふたり分のチケットを財布にしまつて、さっさとフードコートに向かって歩き始める。

「無視はよくないよ、宥斗くん」

わざとらしく言って、後ろからマフラーを引っ張ってやった。

「ぐえ」

「あははっ。カエルみたい」

「はぁ…。紗衣はいくつになってもやること変わらねえな」

「宥斗は一気に老けたみたいね。おとんだし」

クスクス笑うと、宥斗が嫌そうな顔をしてから手で顔を覆う。

「おとん言うな！そんなに短いの履いているところ初めて見たから驚いたんだよ」

「家でこの格好はしないでしょ」

「まあな」

土日と宥斗と会うことはあんまりない。食事も両親がいるので届けなくていいし、お互い友達との予定もある。何もなくてもわざわざ家に行くことはほとんどなかった。

たまに両家で食事に出掛けくらいだ。

中学生の頃はよく一緒に出掛けただけ、高校に入ってから一度もないかもしれない。

余所行きの格好で会うのは、考えてみれば久しぶりだった。

お昼時なので、フードコートはどのお店も人でごった返している。少し並んでから、パスタのおいしそうなお店に入った。

注文をして、メニューを閉じる。

「気にしてるようだから言っておくけどね、このスカート自分で買ったんじゃないからね」

「…誰に買ってもらったんだよ」

水を飲みながら、低い声で宥斗が呟く。

手の甲にめっちゃ筋たってる!!

割れるってば!!

あまり現実味のない心配をしながら慌てて、件の人の名前を言う。

「みのり」

「ああ、早坂か…」

早坂みのりとは、例の合コンに誘ってくれた私の親友だ。

高校に入って最初にできた友達。サバサバしたみのりとは、何年も前から知り合っていたかのように馬があう。

だいぶ前にふたりで買い物に出掛けた時。パンツスタイルの多い私に、「足を出せ!!」と、このスカート以外にも、デニムのショートパンツやらフリフリのシフォンスカートが無理やり誕生日プレゼントとして買ってくれたのだ。

1人ファッションショーでクロゼットをあさっていたら、そのときもらったものの、一度も着てなかったこのスカートが出てきた。

久しぶりの宥斗とのお出掛けに浮かっていた私は、たまにはかわいらしい格好もしたくなって、このスカートに白羽の矢をたてたのだった。

「宥斗、そういうの気にするタイプだっけ？」

中学生の頃は今日程じゃないけど、短いスカートも履いても、何も言われなかった気がする。

「紗衣のは気になる」

その発言は私も微妙に気になる。

「……………」

どう切り返すが迷っていると、宥斗が先に口を開く。

「パンツ覗かれても気づかなそうだろ、お前」

「パンツとか言うなあ!!」

この前から何を言い出すんだ!!

「さっきも言ったけど、もっと周りの目を自覚をしろってこと。そ
んなんだから年下なんか告白されんだよ」

いや、それは年下の方に失礼です。

と、いうか。

「なんで知ってるの!!」

「早坂」

「みいのりいゝ…!!」

「紗衣はモテモテだな」

「モ…!! 宥斗に言われたくない!!」

「俺のは無駄モテだ」

え、モテるのに、無駄とか無駄じゃないとかあるの？

「…最近は大丈夫か？」

「なにが」

「嫌がらせとか、さ」

言いにくそうに目を合わさず、宥斗が聞く。

ああ、まだ気にしてたんだ…。

「大丈夫だよ。みのりと宥斗のおかげで、あれ以来平和」

「そっか」

ほっとしたように、優しく微笑む。

私はその顔に死ぬほど弱い。

照れをごまかすように、早口で告げる。

「あの時だって別に大したことされてないもん。気にしすぎだよ」

瞬間、宥斗の顔色が変わる。

自分の失言に気づいたけど、もうどうしようもなかった。

下を向いて、何かに耐えるように宥斗がテーブルの上で拳を握る。

「お前…っ、どれだけ心配したと思ってんだよ！」

突然声を荒げた宥斗にびっくりする。

そこへちょうど、先ほど注文した料理が運ばれてきた。

タイミングが悪い。

宥斗は魚介のクリームソースパスタ。

私は和風ボンゴレだ。

「いや、悪い。俺が言えたことじゃねえな」

店員さんがいなくなってから、宥斗が呟く。

「ううん…」

…宥斗、そんなに気にしてたんだ。
でもそんなの宥斗のせいじゃないのに。

「なんかされたら、ちゃんと俺に言えよ」

「大丈夫だよ。もうすぐ卒業だしね」

「…たまには頼ってくれよ、俺のこと」

寂しそうに言うてから、パスタに口をつける。

食べ始めた宥斗を眺めながら、私は考えていた。

いつだって頼りにしてる。

嫌がらせなんて、宥斗の傍にいられる幸せに比べたら、全然大したことじゃない。

…だけどそんなこと言えない。そんなの、好きだと言ってるようなものじゃないか。

「頼りに…してるよ」

心に浮かんだ大部分の言葉は、パスタと一緒に飲み込んだ。

No. 7

もうそのことには触れず、宥斗は私が残したパスタまですっかり平らげた。

おいしかったけど、なにせ量が多くて食べ切れなかった。食事を終えると、上映時間も近くなってきたので、映画館に向かう。

ご飯のお金くらいは自分で出したかったのに、「今日は俺が誘って付き合ってもらってるから」と、ここでも宥斗はお金を受け止ってくれなかった。

私の見たい映画を見に行くのに、付き合うも何もないのになあ。

まあそれなら今度はどこかに私から誘って、その時に払わせてもらおう。

勝手に決定した次の約束に、ひとりで嬉しくなった。

少し早めに着いた館内の人はまだまばらで、席には空席が目立つ。チケットの売れ行きからして、もうしばらくしたらいっぱいになるんだろう。

私達の席はスクリーンからだいぶ離れた後ろの方だったので、長い階段を登ってそこまで向かう。

「紗衣、ここ」

チケットと照らし合わせながら席を探していると、宥斗の方が先に見つけたらしい。

声のする方に向かうと、飛び込んできた光景に目を覆いたくなった。

「え…ここ？」

「そう。座れば」

宥斗が先に席に着く。

それを見て私も慌てて座ったが、どうにも居心地が悪くてたまらなかった。

カップルシートという名らしいその座席は、ソファーのようになっている、狭い1人用の座席に座るより快適に映画を楽しめそうだった。

…座席だけなら。

なぜ。

なぜ他のカップルシート みなさんは、人もまばらな中すでに満席状態なのか。

なぜ。

なぜみなさん揃って、「ここ日本ですよ」と声をかけなくなるほど
いちやいちやちゅちゅしているのか。

ここで宥斗と映画を見ろと！！

ある意味拷問だわ！！

「…宥斗」

「なに」

隣の宥斗に声を掛ければ、涼しい顔をして携帯を操作している。

「カップルシートって、こうゆう席なの…?」

「は?どういう意味?」

「み、みなさんいちゃいちゃされてますが」

「まあ、するだろうな。カップルなんだから」

携帯から目線は外さずに、しれっと答える宥斗をドツきたくなった。何回か来たことあるんなら知ってたんでしょー!?

「…恥ずかしい!!」

心の底から声をあげると、まさにいちゃいちゃ真っ最中のみなさんから視線を頂いてしまった。

慌てて顔を下げる。

「恥ずかしいのはお前だ、アホ」

「……………!!」

「紗衣、携帯マナーにしとけよ」

まだ視線がこちらに向いているような気がして、顔を下に向けたままカバンから携帯を取り出す。

大丈夫。大丈夫だ。映画がはじまるまでの辛抱…暗くなっちゃえば何も見えない!!

その後の十数分、私は耐えた。

隣やら後ろやらから、「映画はじまったら、ナニする?」とか、「ねえ、暗くなったら、キスして?」とか、「好きだよ。お前が一番かわいい!」とか言う台詞が聞こえる度に、私が言われてるわけでもないのに、恥ずかしくて泣きたくなった。

そして気を紛らわすために、いちやつくみなさんに脳内でツツコミを入れまくる。

「ナニする気なの!! 映画館に来たのなら、映画を見ろ!!」 「そのキスの計画の立て方おかしいから!! ご利用は計画的に!!」

「一番で!! では二番や三番もいらっしゃるんですか!?!」

ツツコミ疲れたところにやっと館内が暗くなって、予告がはじまる。ほっとひと息つく、隣から強い視線を感じた。

「……………!!」

見てる!! 宥斗がめっちゃこっち見てる!! なに!?! 予告始まったんだから、スクリーンを見ようよ!!

「宥斗…どうしたの?」

小声で訪ねると、こっちをガン見たままの宥斗がお尻をずらして距離を詰める。

「な…!! 近い!!」

思わず出てしまった声はもうしまえず、肩がぶつかる程近くなった

宥斗から目をそらす。

すると、太ももの上に置いてあった手をむんずっ！！と驚掴みにされた。

びっくりして重なったふたつの手を凝視していると、耳に唇を寄せ、宥斗が囁く。

「…映画が始まったら、ナニする？」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

思い切り顔を振り上げて宥斗を見れば、ものすごい至近距離で、意地悪に、面白そうに笑っていた。

ぼんっ!!!!!!!!!!

脳内で、何かがはじける。

私の脳みそだったらドウシヨウ。

一気に顔が赤く染まり、目を合わせたまままた動けなくなった。どうやら私は、予想外にびっくりすることがあると、行動を停止してしまう帰来があるらしい。

どうでもいい新事実を発見したまま、暗くて良かった、顔真っ赤通りにして真っ黒になってるかもしれない、と確認しようのない顔色を嘆く。

すると宥斗は、顔を離し、下を向いて肩を揺らしながら声を出さずに笑う。

そして、私の意識が覚醒する前にもう一撃。

「…紗衣、ホントかわいい」

優しく微笑んで最後の一言を放った宥斗は、顔をスクリーンに向ける。

私と言えば、脳内大爆発、心臓破裂寸前、顔面（多分）真っ黒、生きているのが不思議なほどだった。

もう、なんのなの…っ！！

冗談にしたって、キツすぎる…！！

恐らく私に恋愛感情など持ち合わせていないであろう宥斗からすれば、あの夜のことも、今のことも、警告や冗談のつもりなんだろう。

しかしはっきりと宥斗が好きだと自覚している私にとっては、冗談じゃ済ませられない。笑えない。

優しく微笑んだ最後の一言も、冗談なの？

私以外の女の子にも、こんなことするの…？

思わず、重ねられた手を少しずらして、宥斗の親指を強く握る。大きな手。昔とは違う、男の人の手。

小さい頃は、どこに行く時も宥斗と手を繋いでいた。暖かくて、ふわふわしてて、宥斗と手を繋ぐのが大好きだった。いつの間に、こんなに大きくなったんだろう。

するとそれに気づいた宥斗が再度顔をこちらに向けて、嬉しそうに

笑う。

一度手をほどくと、指を絡めて繋ぎ直す。恋人繋ぎだ。

あの頃と変わらない暖かさを懐かしく思いつつも、その何倍も、宥斗と手を繋いでいる事実が嬉しい。

だけど、私の心に葬り去ったはずの戸惑いが広がっていく。

なんで、こんなことするの…？

わかんないよ…。

見たかったはずの映画のストーリーは、ほとんど頭の中に残らなかった。

No. 8 (前書き)

読んでいただき、ありがとうございます。

冒頭で8割話が書き終わっていると書きましたが、なんと半分くらいから書き直しています。

理由は後半にきての紗衣ちゃんの暴走。キャラがびっくりするほど勝手に動きます(´ω´)

活動報告に、小話を書きましたので、興味ある方はご覧下さい。

No. 8

ずっと映像は見ていたはずなのに、いつの間にかエンドロールが流れていた。

館内が明るくなり、人が出口に向かって流れていく。

上映自覚は2時間ちょっと。その間、手は繋がれたままだった。

「行くか」

宥斗は私を引っ張りあげて、手を離すと、そのまま出口に向かう。ほどこれた手を少し寂しく思っていると、段々自分の身勝手さに苛立ちが募ってきた。

手を繋がれた時は嬉しいけど宥斗わけわかんないかと思ってたくせに、離れたら寂しいだなんて…！

恋とはそういう身勝手なものなのだろうけど、初めて体感する感情に戸惑う。

あの夜までは、こんな風に自分の感情に振り回されることなんてなかった。好きだけど苦しい、という思いはいつも抱いていたが、苦しい部分はとても小さくて、概ね好きという感情は、とても暖かくて、それだけで胸がいっぱいになったり、宥斗の傍にいられることを幸せに思うものだった。

一人で勝手に喜んだり、落ち込んだり、あの夜から私の恋心は、目まぐるしく動くものになった。

「せっかく来たし、どっか見て行くか」

映画館を出て、ショッピングモールの出口に向かって歩いていた宥斗が突然言った。

「え…」

「もう帰りたい？」

「ううん！」

満面の笑みで返す。

このまま帰るものだと思ってたので、素直に嬉しい。

進行方向を変えた後、スルリと手を繋がれる。またしても、恋人繋ぎ。

「嫌か…？」

少し頭を下げて心配そうな顔をした宥斗が訪ねる。

そんなの決まってる。

「嫌じゃ…ない」

宥斗が発する甘い空気に耐えられなくなって、そっぽを向きながら無愛想に答える。
でもきつと顔は赤くなってしまってるだろう。明るいところだと隠しようがない。

私の返答に宥斗は嬉しそうに笑ってから、「じゃあ行くか」と歩みを進める。

「紗衣、どっか行きたいところある？」

「うーん：お店ありすぎて、何から見たらいいかイマイチわかんないや」

「なら俺行きたいところあんだけど、いい？」

「うん！」

エスカレーターに乗って、階を登る。

着いた先なは、男性物の洋服屋さんが立ち並んでいた。

「洋服見たいの？」

「ああ。この前来たときに欲しいコートがあったんだけど、色で悩んで決められなくてさ。面倒くさくなってその時は買わなかったんだけど」

「へえ…。なんでも即決の宥斗が珍しいね」

そのまま手を引かれて、宥斗のお目当てのコートがあるらしいお店に入る。

男性ブランドのお店に入るのは初めてで、ちよつとドキドキした。宥斗は迷いなくコートに辿り着くと、黒とカーキのコート指差した。

「これ」

「N3Bかぁ。似合いそうだね」

「紗衣、どっちがいいと思う？」

「え！？私！？」

「お前以外誰がいるんだよ」

「えゝゝ」

思わぬ大役を仰せつかって、ドギマギする。だいぶ挙動不審だ。だいたい男の人の服選ぶのだって初めてだよ！！

今まで宥斗以外の男と出掛けたことなどない。必然的に、何をするにも異性では宥斗が初めてになる。

私が選ぶのを、宥斗はじっと待っている。

コートを交互に見比べ、何度も宥斗を見やる。

…ダメだ！！どっちも似合いそうとか思っちゃう！！

惚れた欲目だろうか、まあ多分違うだろうけど、黒もカーキも、宥斗によく似合いそうだった。

少しの時間悩んでから、宥斗に告げる。

「ダメだ！！見ただけじゃわかんない！！着てみてくれる？」

「嫌だ。見ただけで選べ」

「はあ!？」

なーんーでー!?! そんなに難しいお願いですかコレ!! 選ばせるなら着てみせるくらいしてくれ!!

脳内ツッコミが聞こえたのだろうか。 宥斗が顔を背けながら、ボソッと呟いた。

「…なんか恥ずかしいだろ」

ドキュンッ!!

頬を少し赤く染めて、スネたように呟いた宥斗から、見えない銃弾が飛んできた。

ピンポイントで私を撃ち抜いて、危ない、もう少しで再起不能になるところだった。

照れる宥斗!! 長年「幼なじみ」をやっているけどほとんど見たことがない。貴重だ。

「かわいい…」

思わず呟くと、宥斗が眉を寄せたので、慌てて叫ぶ。

「いいから!! 着て!! ね!？」

「……………」

無言のまま繋がれた手を離てから、マフラーを外し着ていたライダースを脱ぐと、私に差し出す。

あ、持ってるってことね。はいはい。

それを受けとると、宥斗はまずカーキのコートから袖を通す。またしても危なかった。かわいい、は高校生男子には言ってはいけない言葉だったらしい。

着終えると、やはり恥ずかしそうにこちらを向く。

「は～…やっぱN3B似合うねえ」

N3Bとは、コートの名称で、ミリタリーコートのようなものだ。丈が長く、だいたい膝上くらいまでで、薄いのからモフモフしたのまで色々あるが、宥斗の着ているのは裏地がキルティングになっていて暖かそうだった。

フードにはファーがあしらわれていて、宥斗の小顔っぷりを強調する。またそのファーがよく似合う。

じいっと見つめていると、宥斗の顔がますます赤くなる。なにこれ。ちょっと楽しい。

いつもやられてばかりいるので、たまには仕返しとばかりに声あげる。

「似合うよー。かつこいいよー!! 素敵だよー!!」

「お前…わざとらしいんだよ!!」

「写メ撮っていい? 照れる宥斗貴重すぎる」

「やめろ」

ニヤニヤしながら携帯を取り出す私に嫌そうに言うと、カーキのコートを脱いでもう黒のコートを着る。

からかいすぎたのか、照れ顔は完全に不機嫌顔に変わっていた。残念。

「ん〜。黒の方がしっくりくるんだけどなあ…でもカーキも新鮮でいいってゆうか」

宥斗は基本的に黒い服を着ることが多い。黒の方が宥斗っぽさがあったけど、カーキも新鮮で良かった。これは難しい…。

考えてる間にコートを脱いで、私の手からライダーズとマフラーを取る。そして、着ながら言う。

「どっち？」

「ん〜！！やっぱりこっち！！」

「黒？」

「うん。見慣れてるせいもあるかもしれないけど、黒の方が似合うし宥斗っぽい。」

「じゃあ、こっちにする。ありがとな」

うわー！！私の決定がホントに最終決定なの！？

「ちょっと待ってて」と、宥斗は黒いコートを持ってレジに向かう。

…なんか。

なんか今のやりとり、ちょっと恋人同士っぽくない！？

私はもともと買い物は一人で行く派で、みのりともセールの時くらいしか一緒には行かない。このスカートを買ってもらった時のはいレギュラーだ。

セールの時は、たいてい建物の入り口解散、出口集合。各自好きなショップを回って、どうしても迷ったら合流する。その後カフェでカラオケで戦利品を見せ合うという流れだ。

あの時は珍しく、みのりも私のお気に入りショップについて来て、「足を出すことがいかに大事か」について熱弁しだした。

足は、出さないと筋肉が怠けて太くなるらしい。いつも出して緊張状態を続けると、自然と細くなるそう。みのりの持論だけど。

「紗衣はそれより、女子力向上が目的!!」だそうで、パンツスタイルばかりではもったいないし、スキのある格好をすることこそがモテの秘訣なんだと拳を握っていた。

別にモテたくもない私は、新作のデニムを漁っていたが、振り向いたらみのりがレジで買い物を終えていた。

その中の一着が誕生日プレゼントと称して無理やり買って頂いた、今日のスカートである。

そんな買い物一人派の私が宥斗にうまくアドバイスできたかは謎だけど、選んだ服を買ってくれたのはうれしかった。

たまには誰かと買い物に来るのもいいもんだなあ。まあ宥斗とだから、かもしれないけど。

みのりはともかく、異性なら宥斗以外とは考えられない。これも恋心ってやつか。

宥斗のレジがなかなか終わらないので、店内を見て回る。

このお店の洋服はどれも宥斗に似合いそうで、いつそイメージモデルでもやったらいいんじゃないかと思うほどだった。

その中で、ふと、白いマフラーに目を奪われる。

触り心地のいいふわふわのマフラー。かわいいなあ…。

手にとって見ていると、レジから手ぶらで宥斗が戻ってきた。

「悪い。新しいの出してくれるみたいで、今倉庫に取りに行ってる。」

「あ、そうなんだ」

「それ、欲しいのか？」

宥斗が私の手にあるマフラーを指差す。

「そういうわけじゃないんだけど、ふわふわでかわいいなあと思って」

「多分、これの色違い」

自分のしている黒いマフラーをつまんで持ち上げる。

よく見ると、本当だ。今私の持っているマフラーの色違いだ。

「あ、ホントだ。そのマフラーここで買ったの？」

「ああ。この前来たときに」

さっきコートの試着している時に見たのに気づかなかった。だけど、自然と同じものを手に取ったのは嬉しい。

さすがに分かっていてお揃いを買うのは気恥ずかしいので、話ながらそっと棚に戻す。

「かわいいね。白いマフラーって持っていないから目についちゃった」

「今日の服に合いそうだな」

棚に戻したマフラーを宥斗が手に取った。

それをふわっと私の首に巻き付けらる。顔回りにある宥斗の手にドキドキする。

「…うん。似合うじゃん」

やんわり笑って言われると、恥ずかしくて恥ずかしくて、さっき宥斗をからかった事を心の中で詫びた。

「これ、買ったら使うか？」

「あ、うん。制服にも合いそうだね。でも今日はやめ…」

まだ話してる私を無視して、宥斗はそのままレジに向かうと、倉庫から戻ってきたらしい店員さんに白いマフラーを渡す。

ええ！？買ってる！？

「宥斗！！いいって！！」

レジに駆け寄れると、小声で宥斗に叫ぶ。

その間にも店員さんはマフラーのタグを切ってレジを打つ。
ああ…。

「ちょっと早めのクリスマスプレゼント。今年は何にしようか悩んでたから、ちょうどいいだろ」

宥斗はお財布を出して、提示されたお金を払いながら言う。コートとマフラー。バイトもしていない私からしたら大金だ。宥斗だっでしていいはずなのに、なんでそんなにお金持ってるの!?

私と宥斗は、毎年クリスマスと誕生日にはプレゼントを交換しあっている。もう何年も続く行事のひとつだ。

予定日が同じだったらしい私達の誕生日は1日違い。宥斗が8月12日。私が8月13日。

毎年夏と冬に2回。相手に喜んでもらえるプレゼントを考えるのはなかなか難しくて、最近のプレゼントはギャグ化してる感じがいない。もちろん私はそんなプレゼントを選ぶのもとても楽しいけど。

だから宥斗の気持ちは分かる。でも今日はお金を出してもらいすぎだ。しかもお揃い…っ!!嬉しい。嬉しすぎる。でも。

お店の外に移動した私のところに、宥斗がコートに入った袋を肩から下げてやって来る。

「はい。メリークリスマス」

白いマフラーは袋に入っておらず、また宥斗によって首に巻かれる。すぐ使えるように、そのままもらってきてくれたようだ。

「…早くない?」

明らかにわざとらしく言う宥斗に下を向いて答える。

「当日はないからな。文句言うなよ」

「言わないよ!!」

宥斗の首もとに視線を移せば、当然同じものが巻かれている。お揃い。…嬉しい!!でも恥ずかしい。そればかりだな、自分。

「…ありがとう」

「どういたしまして。お揃い、だな」

お揃い、の部分に激しく強調して宥斗が言う。私がそれを恥ずかしがっていることに気付いているんだろう。意地悪だ。いつものことだけ。

また並んで、ショッピングモール内を歩き出す。

No. 9

自然に繋がれた手がこそばゆい。
ギュッと握ると、会話の途中でも、握り返してくれる。

「他に行きたいところはある？」

私が訪ねると、ちようと建物の案内図がある場所で、宥斗は歩みを止める。

「俺はこれ買ったからもう満足。ほら、紗衣の行きたいところ選べ」

「んゝ…」

パネル式の案内図は、タッチすると、そのお店の情報が細かく出てくる。まるで最新の携帯電話のようだ。

私は目当ての店を探し続ける。

「あ」

「なんかあった？」

「ここ行きたい」

「アクセサリーショップ？でもこれメンズブランドだぞ」

「いいの。ここがいい」

ふーん、と言うと、お店の配置が全くわからない私を、宥斗が引張って先導してくれる。

目当てのアクセサリーショップに着くと、宥斗は手を離してそっぽをむいた。

「宥斗？」

「…俺、いない方がいい？」

なんで不機嫌？

何をどうしたら、宥斗がいない方がいいのだろう！！頭の中を見せ
てみる！！

最近ポイントがよくわからないから困る！！

不機嫌、というよりもスネた風な宥斗を見上げて困惑する。

「いや、宥斗がいないと困るんだけど」

「なんで」

今度はあからさまな不機嫌な態度。もう、なんなのっ！？

「宥斗にクリスマスプレゼントを選びたいから、一緒にいて！！」

「え？」

驚いた顔で呆ける宥斗を店先に残して、私は店内へ入る。

普段ならひとりじゃ絶対入れないお洒落な店内は、周りを見ると緊張で怪しい動きをしてしまいそうなので、品物のみに集中する。

ここは、先日読んだ雑誌の、「クリスマスプレゼント特集!!」というページに載っていたお店だ。

確か、「男の子がもらってうれしいブランドランキング」みたいな感じだったと思う。

今年のクリスマスプレゼントはピアスにしようと思っていたので、男性ブランドなど分からない私はみのりに教えてもらいながら一緒に雑誌を見ていた。

先ほどみた案内図で、たまたま見覚えのあるこのブランド名を見つけたので、連れてきてもらったのだ。宥斗の気に入るものがあるといいけれど。

うゝん：やっぱ高いなあ。

でも、今日はたくさんお金出してもらっちゃったし、今年は奮発だ!!

ひとりで息巻いていると、宥斗が真後ろにいた。

「うわっ!？ ちょっと、びっくりさせないでよ!!」

「…俺に？」

「そうだってば!!」

がなりながら、何にそんなに驚いているのか不思議でたまらない。宥斗以外の誰にプレゼントしろというのか。

「…いや、誰かにやるプレゼントを選ぶのかと」

「だからっ!! プレゼントあげる相手なんか宥斗くらいしかないもん!!」

「いや、うん。…やべえ、嬉しい」

満面の笑みで、ぽんぽんと頭を撫でられる。

うん、あの、いつまで撫でてるの。嬉しいけど恥ずかしいってば!!
!…いや、ずっと撫でてでもいいけど。

先ほどからの連続スキシシップに、私の心臓もいい加減耐性がついたようだ。ドキドキはもちろんしているけど、爆発寸前まではいかない。

ほんのりとした幸せを、ただ感じられる。

「…宥斗、ピアス開けたいって言ってたでしょう。だから今年のクリスマスプレゼントは、ピアスにしようと思ってて」

宥斗が私の頭からすつと腕を引いて、手を繋ぐ。

「久しぶりのまともプレゼントだな」

ここ最近のプレゼントを思い出したのか、おかしそくに笑いながら宥斗が言う。

「あれだって、すごい悩んで決めてるんだからね!? 大切にしよう!」

「わかってるって。」

ギャグは中途半端ほど恥ずかしいものはない。やるなら、ヒかれるくらいとことん！！な私は、ギャグなプレゼントを探し当てるために通販だつてする。

何をプレゼントしたかはあえて語らないけど、内容的には、笑いは取れるだろうけど私なら絶対欲しくないものだ。以上。

「そーいや紗衣もピアス開けたいって言ってたな」

思い出したように、宥斗が言う。

「うん。でも卒業してからにする」

「真面目だなあ、紗衣は」

「あんたが不真面目すぎるの！！」

「はいはい」

宥斗は、うーん、と唸りながらいろんなピアスを見ている。

もちろん店内にはいろんなアクセサリーがあつて、宥斗にすごい似合いそうな指輪があつたけど、眺めるだけで我慢した。

指輪は、贈れない。

私は「幼なじみ」なんだから。

「これ、いいな」

「…宥斗？確認だけど、ピアスは耳に開けるんだよね？」

宥斗が手に取ったそれを見て、恐々聞く。

「他にどこに開けんだよ。鼻か？」

「ホントやめて」

持っているピアスを鼻にあてる宥斗を速攻で拒否する。

「紗衣、鼻ピ苦手だっけ？」

「みのりが2年生の時に、鼻にピアス開けたのね。でも上手く穴が安定しなくて、もう恐ろしいほどに膿んでたの。それを毎日間近で見ながら、鼻にピアス開けてる人見ると痛そうで…」

思い出しただけでも鳥肌がたつ。

その時は、「見てて痛いからバンソコウしてくれ」とみのりに頼んだのに、こともあろうか、「めんどくさい。私には見えない」と言い放った。

結果、みのりの鼻に毎日消毒して、バンソコウを貼っつけていたのは私だ。

女子高生のポケットに常にマキロン。あんまりいないだろう。

それでも穴が閉じるのにだいぶかかった。もうこれっきり、思い出したくもない。

「ああ、毎日マキロン持ってた時のやつか」

宥斗も覚えていたらしい。顔をしかめる。

「そう。で、宥斗はファーストピアスから、そんな大きい穴をあけるつもりなの？」

「いきなりは無理だろさすがに。拡張器買って、徐々に広げんだよ」

「痛いー！！想像しただけで痛いー！！！」

開いてる方の手で耳を塞ぐ。

宥斗が選んだそのピアスは、普通のピアスよりもだいぶ太い。シルバーの丸い玉がついていて、別のピアスとセットになっている。こちらは普通のサイズのフープタイプのもの。模様が施してある。

「紗衣は痛くねえだろ」

「見てるだけで痛いんだってば！！それにしてもいいけど、当分宥斗と目え合わせないからねっ」

いくら恋する乙女でも、恐ろしいものは恐ろしい。あれが宥斗の耳についていると考えただけで顔を見れる気がしない。膿んだらもつと恐ろしいことになる。ブルブル。

もう完全にトラウマの域だ。

私もずっとピアスを開けたかったけど、みのりのを見て一気に開ける気がうせた。

だけど、耳たぶに普通のピアスならみのりもいくつもしていて、それが膿んではいるところは見たことがない。

みのりが大丈夫ならまあ平気だろう、とちょっとひどいことを思いつつ、また開けたいな、という気持ちが最近復活したのだ。

「…じゃあやめる」

「え？」

ここは「じゃあ見んな」って返してくるところじゃないの？
いつもの宥斗なら。

「紗衣の顔が見れないのは嫌だ」

「……………!!」

不意打ちで爆弾を落とすのはやめて頂きたい。

そちらにその気はなくても、こちらは相当のダメージを食らうのだ。

やっぱり今日の宥斗はおかしい。甘い空気がプンプンどころじゃない。ダダモレだ。

「じゃあ、これにするか」

爆弾を投下した本人は、すっかり気を取り直して新しいお気に入りを見つけたらしい。

「ペアピアス？」

初めて見たそれは、先ほどの模様の入ったゴツめのフープピアスと、同じ模様の華奢な、やはりフープピアスがセットになっているものだった。ちなみに普通サイズ。

これどう考えてもカップル用だけ…。

「紗衣が開けるまで待つことにする。」

「一緒に開けるってこと？」

首を傾げて聞けば、宥斗は笑って頷いた。

「同じ時に開ければ、膿むのも同時だろ」

「その話題から離れて！！むしろ極力膿まない方向で進めて欲しいんだけど!？」

爆笑している宥斗を睨みつける。

「卒業式の日、一緒に開けよう」

照れも何もなく、優しく微笑む。私の一番好きな、宥斗の表情。

「…またお揃い？」

「ああ。」

「宥斗、お揃い好きなの？」

それこそ新事実だ。

でも、誰彼構わずお揃いにされたら私としてはたまったもんじゃない。繋がった手に力を込めて訪ねた。

のに。

返ってきた言葉は。

「別に。好きじゃねえ」

「どっちだよ!!」

思わず鋭いツツコをお見舞いしてしまった。耐え性がなくてごめんなさい。

「紗衣、これがいい」

手に持っていたピアスを私に差し出す。

「…でも、これじゃ私の分もプレゼントすることになっちゃうよ」

いくら多少割高商品とはいえ、半分自分のものになってしまったら、今日払ってもらった金額の割に合わない。

お揃いがまたひとつ増えることはもちろん嬉しいけど、それでは本末転倒のような気がした。

「これが欲しい。」

はっきりと強い意思を見せつけられては、もう何も言えなくなる。

「わかった」と返してレジへ向かう。

一応クリスマスプレゼント仕様に包んでもらってから、先にお店の外に出ていた宥斗に袋ごと手渡す。

「はい」

「ありがとな」

結局半分自分のものなのに、これでいいのか、と私は少し納得がいかなかった。だけど、いそいそ包みをあけて、さっき見たばかりのピアスを取り出して嬉しそうに眺める宥斗を見ると、喜んでくれるならまあいいか、という気になってくる。

几帳面にピアスを包み直してから、宥斗が言った。

「卒業式、楽しみだな」

「…そだね」

微笑んで答えたつもりだったけど、うまく笑えていたかは、私にはわからない。

No. 10 (前書き)

大学のサークル活動について、身勝手な表記があります。
不快に思われる方がいらっしゃいましたら、申し訳ありません。

No. 10

そのあと、フードコートにあるお店でおいしいシャーベットを食べて、「寒い季節に食べるアイスはなぜおいしいのか」と、熱弁をふるっている、「アイスはいつ食べてもアイスだろ」と、実に宥斗らしい返答を頂いた。

一息ついてから時計を見ると5時を回っていたので、そろそろ帰ろうか、と駅に向かう。

そこから電車に乗って、最寄り駅に着くと、家までの道のりを歩く。

夕方の日曜日の駅前には、私達と同じく、帰宅するであろう人々で賑わいを見せていた。家族連れやカップル。吐く息が白い。肩を寄せて、または手を繋いで。みんな楽しそうに、それぞれの家へと帰っていく。

ロータリーに植えられている木を見渡すと、どの木もとうに葉が枯れ落ちている。

落ち葉を踏みしめれば、シャリシャリと、小気味いい音がした。

目線を下に向けたので、宥斗にプレゼントしてもらった白いマフラーが目に入る。

お揃い。それは嬉しい。嬉しいんだけど…。

ちらりと宥斗を見れば、視線に気づいたのか、宥斗が先に口を開く。

「なに」

「…宥斗、そのマフラー学校にもして行く？」

宥斗が制服姿でマフラーを巻いているのは見たことがない。

私としてはぜひ学校にもして行きたいが、万が一、宥斗もこのマフラーをしてきたら。お揃いのマフラーを巻いて登校する、なんてことになれば、宥斗親衛隊のみなさんを自ら刺激することになりかねない。

ずっとそのことが気になっていた。

卒業まであと少し。できればこんな時期に波風は立てたくない。

「今まで学校にはしてったことねえな。でも明日から使うか」

「じゃあ私はやめとこう…」

「なんでだよ。せっかく買ったんだから使えよ」

気をつけろって言ったのは自分なのに！！わざとか！？新手の嫌がらせか！？

そのことを誰よりも気にしている宥斗にはありえないけど、私の脳内はありえない方向にツッコむ。

「…なんかされたら、絶対俺に言えよ」

黙った私の意図を汲んだのか、白いマフラーを引っ張って、言う。やっぱり気にしてる。そしてしつこいほど心配性。

「なんもされないでしょ。」

宥斗がそのマフラーして来なければ、と心の中で付け足す。

「もう氣い遣うのはやめたから」

？なんの話だろう。まさか親衛隊のみなさんに氣を遣っているのか。

「もうすぐ卒業だな」

さすがに話をそらされたことに気付いたが、話したくないことなんだろう。深く追求はしないでおく。

「そだね。もう一緒に学校通えないね」

「反対方向だしな」

私達はもう推薦枠での大学合格が決まっている。

高校は、家から近いのと、「宥斗が一緒だから」というので決めてしまったけれど、大学は違う。

将来に繋がる大切な選択、もうそんな子供じみたことは言っていない。

私は将来外資系ホテルでのフロント業務に就きたいと思っているので、いろいろな国の言葉を学べる英文科のある女子大へ。宥斗はスポーツ医療を学べる四大へ、それぞれ進学する。

路線は同じとはいえ反対方向に位置する大学に、共に登校するのは不可能だ。

「なかなか会えなくなるだろうね。なんか寂しいね。」

これがもし「彼女」なら、帰宅時間が合う時はどこかで待ち合わせで、今日のように買い物でも楽しむのだろうか。

「幼なじみ」の立場を痛烈に実感した私は少し寂しくなる。胸が痛い。

「会えるだろ。毎日飯届けに来てくれるんだし」

「あ。言っていなかったっけ？うちのお母さん、私の卒業に合わせて仕事やめるの」

「は！？聞いてねえよ」

心底驚いた顔の宥斗を見て、この話をしていなかったことを認識する。

「ごめん…話したつもりでいたんだけど。私が大学に入れば、ひとり子育てにかかるお金もなくなるし、もう仕事辞めて主婦に専念するんだって」

「…おばさん、本当に仕事辞めるのか」

「うん…もしかしたら、私が家事を手伝ったせいで、心苦しかったのかなあってちよっと心配してるんだ」

「そんなことねえだろ。少なくともうちの親は、平日紗衣の飯が食えて喜んでる」

「そっか。それならよかった」

私の母親は、私が小さい頃から働きに出ていたけど、出来る範囲でいつも家事を頑張ってくれていた。

遅くまで働いてから、家のことをやる母親の体調が気になって、夕飯の支度をやってきたが、母はいつも食卓に並べられた夕飯を見て申し訳なさそうにしていた。

「高校生なのに、ご飯の支度なんてやらせてごめんね」、「遊びに出たいだろうに、ごめんね」といつも言っていた。

だけどそれとは裏腹に、私の作ったごはんを、「おいしい、おいしい」と喜んで食べてくれる父と母を見るのが嬉しくて、母の就寝時間の早くなったのが嬉しくて、自己満足で夕飯の支度を続けていた。

掃除も洗濯も、お弁当作りも母がやってくれる。

私は本当に夕飯を作るだけ、だ。遊ぶのは土日で充分だし、料理は好きだから全く苦じやないと母には伝えきたつもりだったが、もしかしたら重荷だったのかもしれない。

「気になるならおばさんにちゃんと話せよ。お前がそんなに落ち込んだら、おばさんだって悲しむ」

「ん。そだね。ありがとう」

「じゃあ卒業したら、もう紗衣の飯食えねえなあ」

「大学入ったら、サークルとかもあるだろうし家でごはん食べる方が少ないかもよ」

宥斗との接点は、卒業を機になくなっていく。わかっていたことだ。それでも、「幼なじみ」を選んだのは自分なのに。

今日が楽しすぎて、この先を望んでしまう。宥斗と、ずっと一緒にいたい…。

「紗衣も？」

「何が？」

「紗衣も、家にいること少なくなんの？」

「いや、私は女子大だしねえ」

「それ別に関係ねえだろ。むしろ女子大のがコンパとか多そうだしな」

「そういうもんなの？」

「いや知らねえけど」

ならその情報はどこ調べなんだ。小さく笑って私は言う。

「コンパとか、あっても行かないよ。出会いは欲しくないし」

最愛の人にはもう出会っている。

世界が狭いかもしれないけど、別にいい。私は宥斗がいい。

「俺だってサークルなんか入らねえよ。人を遊び人呼ばわりするな」

いや、だからそれサークルに入ってるみなさんに失礼です。宥斗の代わりに謝ります、ごめんなさい。

宥斗がサークルに入らないということにはほっとした。身勝手だけど、出来ればこれ以上、女の子の敵は増えて欲しくない。

だけど。このままじゃ…

「でも、きつと今みたいには会えなくなる」

宥斗の顔が見れなくて、前を向いたまま告げる。

認めなくちゃ。弱い自分を。他の誰でもない、宥斗の前で。

私は「幼なじみ」。

この一言は、それを何よりも象徴する。

「……………」

話ながら、ちょうど家の前に着いた。

私から、繋いだ手を離す。

宥斗は黙ったまま顔を上げない。

「今日はホントに楽しかった。ありがとう宥斗。また、明日ね」

「…ああ。」

先に宥斗に背を向けて、小走りで家の中に入る。

ブーツを投げるように脱ぐと、階段を勢いよく上り、自分の部屋に入ると、そのままベッドにダイブした。

No. 10 (後書き)

新しいお話を、一瞬で読み終わるくらい触り部分だけですが投稿しました。

「幼なじみ」が完結次第更新していこうと思っていますが、なんせド変態が私の脳内で暴れまわるので、もしかしたら「幼なじみ」と平行してそちらの更新もするかもしれません。

もちろんこちらを優先して更新していきますが、よろしければご一読ください。

たくさんの方に読んで頂いてるようで、予想外のことに驚いています。とても嬉しいです。引き続き12月中の完結を目指して頑張ります。よろしく願います。

No. 11

スカートがしわになりそうだけど、そんなこと今はどうでもいい。別れ際、黙り込んだ宥斗の事が気になる。だけど顔を見たらやっと決心した気持ちが鈍りそうで、逃げるように帰ってきてしまった。

宥斗はなぜ黙ってしまったんだろう。

いくら考えてもそんなの、私にはわからない。宥斗にしかわからないのだ。聞かなきゃ、答えは出ない。私はそれをしなきゃいけない。

怖いくらいに思考が冴え渡っている。これが、背水の陣でやつんだろうか。

今朝、出掛けるまでは、「幼なじみ」ならずと傍にいられると思っていた。

だけど、それは大きな間違いで、ずっと傍にいられるなんてことはありえない。

宥斗にもし「彼女」ができれば、宥斗は今日のように「彼女」と過ごすんだろう。

そうしたら、私と一緒にいることなんてしなくなる。

当たり前だ。「彼女」より「幼なじみ」を優先する男がどこにいる。

仮に、宥斗にこのまま「彼女」ができなくても、一緒にいられるのは卒業まで。

そこから先は、もうそれぞれの道に行く。

私も大学に入ったらバイトをしたいし、コンパには行かなくてもきつと友達と出掛けることも増えるんだろう。

宥斗だって同じだ。

夕飯は母が作るようになって、届ける名目で会うことも叶わない。いや、届けるだけならできるかもしれないが、そもそも今のように、毎日決まった時間に家に帰る生活じゃなくなる。

なんて浅はかな勘違いをしていたんだろう。

「幼なじみ」では、宥斗の時間を独占することなんてできないのに。宥斗も、私に会いたいと思ってくれなければ、会うことすら難しくなる。

宥斗と話していて実感した。

自分はそのことにとくに気づいていたのに、振られるのが怖くて、逃げていただけだ。

宥斗の行動の意味を考えてもやっぱり分からない。

期待する気持ちがあったのは最初だけで、ベッドに押し倒されたのも、手を繋いだのも、かわいいと言われたのも、お揃いのものを買ってもらったのも全部事実だけど、やっぱり私以外の子にもするのかもしれない。

それだって、聞かなきゃ始まらない。

もう逃げるのはやめよう。

逃げて、宥斗とずっと一緒にはいられない。

そのためには、この気持ちを宥斗に告げなくちゃ。

どうせ一緒にいられなくなるなら、気持ちを伝えてからがいい。

そして、出来ることならこの先も宥斗の隣いるのは私でありたい。

言おう。

宥斗に。

失うことを恐れるほど、私が一番大切なあなただから。

欲張りで、ごめん。

「幼なじみ」じゃ嫌だ。

私、宥斗の、「彼女」になりたい。

No. 12

「…紗衣。さくえく!!」

「ん…?」

「もう9時だよ。起きな」

「9時…。9時?」

ガバツと起き上がり顔面蒼白になる。私はいつの間に眠ってしまったんだろう。

「ちっ遅刻ー!!!!」

「大丈夫。夜の9時だから」

慌ててベッドから飛び降りた私に、母がのんびりと告げる。

「夜か…なんだあ…」

びっくりした。自慢じゃないが今のところ皆勤賞なのだ。

3年の12月、こんな時期に寝坊で遅刻なんてシャレにならない。もうすぐ卒業なのに。

卒業…

「あれ、お母さん? 帰りは月曜日の夜じゃなかったっけ?」

寝起きのせいもあるだろう、思考にふけりそうになった自分に待っ

たをかける。

出張でないはずの母が、エプロン姿で私の部屋にいる。

「仕事が早めに片付いたの。最後の出張終わっちゃったー！開放的でいっぱい！！」

ニコニコ笑いながら言う母に、先ほどの宥斗との会話を思い出す。聞いてみよう。ちゃんと。

「お疲れさま。お母さん、ごはん作ってくれたの？」

やはりシワだらけになってしまったスカートを払いながら、着ていたコートを脱ぐ。

布団もかけずに眠ってしまったのに、温かったのはこのコートのおかげらしい。

私の人生においての、一大決心をしていたはずなのに。間抜けなことでだが、うたた寝をしてしまったようだ。うたた寝、というには少し長い眠りになったが。ここ数日続いた寝不足のせいだろう。

あの高揚感を返してくれ。

あのままの勢いなら、すぐにでも宥斗に伝えに行けた、…かもしれない。

「うん。久しぶりにケーキも焼いたの。お父さんは予定通り明日の夜になるみたいだから、一緒に食べよう」

「わー！！うれしい！何のケーキ？」

「紗衣の好きないちごのタルトだよ。出張先で、早もののいちごが売ってたから、たくさん買ってきちゃった」

「ありがとう！！すぐ着替えちゃうね」

いちこのタルトと聞いて一気に眠気が吹っ飛ぶ。母の作るケーキはどれもとてもおいしいけど、無類のいちご好きの私に、そのケーキは何よりのご馳走だった。

部屋着をクロゼットからだしていると、まだ私の部屋にいた母が言う。

「あらあら！今日はずいぶんかわいらしい格好してるのね。デート？」

完全に面白がっている。でも期待にお答えできなくてすみませんね。

「デートじゃない。宥斗と映画見てきたの」

「きゃー！ゆうちゃんとデートだったの！？」

「だから！！デートじゃないっ！！」

人の話を聞いて欲しい。何をそんなに喜んでいるのかよくわからないけど、まあ楽しそうだからいいか。ゆうちゃん、とはもちろん宥斗のことだ。

「そんなに短いスカート履いて！ゆうちゃんヤキモチ焼かなかったあ？」

「ヤキモチは焼かれてないけど、なんか怒られたよ。最後までぶつぶつ言ってた。そんなに短いかな。見苦しい？」

自分のスカートを見下ろす。母にまで指摘されるとは、やはり短いらうか。制服と変わらないと思っていたけど、短かすぎて見苦しいのかもしれない。

「全然!! よく似合ってるよ。せっかく私譲りの綺麗な足してるんだから、出さないと!!」

私譲りって。お母さん、勘弁してください。

「みのりにも言われたの。足を出せって」

「そのスカートみのりちゃんに誕生日の時にもらったやつでしょ? いつ履くのかな」って思ったけどまさかゆうちゃんとのデートに履いてっちゃうとはねえ」

やれやれ、と頭を振りながら言われて、デートじゃないっていう私の主張は再度無視された。

1人ファッションショーの成果を二度も、それも別々の人から否定されてちよっと打ちひしがれる。

「髪もかわいいよー紗衣。美人に産んでくれてありがとう、って言ってもいいよ?」

こっちはことはおかまいなしに続ける母に、げんなりする。

「美人に産んでくれてアリガトー」

全くもってそんなこと思ってもないけど、棒読みで答える。
私が美人なわけあるか。

「どういたしまして」

ケラケラ笑いながら、母は私の部屋を出て行く。

部屋着に着替えてリビングに向かえば、ダイニングテーブルの横に思わずツツコみを入れずにはいられないほどのいちごの箱が、山積みになっていた。

「いや、買いすぎでしょ」

「紗衣箱食いしていいよあとで麻理子ちゃんどこにも持って行くと思うてるから、その分はとっておいてね」

キッチンから料理を運んできた母は楽しそうに言う。

麻理子ちゃん、とは宥斗の母親のことである。

ちなみにうちの母の名前は紗理奈というが、母親ふたりは未だにお互い名前をちゃん付けで呼びあっている。

「さすがにこんなに食べれない」

「そんな事言わないで食べて」

この量を新幹線で持って帰ってきたのか。相変わらずものすごいバイタリティに頭が下がる。

「手伝うよ」

「ありがとう。じゃあ、スプーンとお箸と、小皿並べてくれる？」

うん、と返事をして、食器棚を開くと、隣に立っている母が「あら」と声をあげる。

「紗衣、つけまつげしてるの？」

「うん。みのりに自然なつけまつげ教えてもらったの。化粧の時間短くなったし、便利だよ」

さすがに目ざとい。だけど、宥斗と出かけた後だと知られているので、張り切ってお洒落をしたのがバレるのは恥ずかしかった。いや、多分もうバレてるけど。

「近づかないとわかんなかったなあ。上手に付けたねえ。最近のつけまつげってすごいよね。すごい自然!!」

「アリガトウ…」

娘をそんなに誉めないでくれ。

うちの母は、化粧品会社に勤めている。だからなのかはわからないけど、私が少しいつもと違ったメイクを施すと、すぐに気づく。

「ゆうちゃん気付いた？」

でっかい目を三日月型に細めて笑う母。

「…っ気付いてない!!」

今し方、近づかないとわからなかったと言いませんでしたか！
そういう意味ですか!?

恋愛思春期の娘をからかうのもいい加減にして頂きたい!!泣くぞ

!!

「なあゝんだ。やっとラブラブな二人を見れると思ったのにいゝ」

残念。と言いながら母はダイニングテーブルに足を向ける。

どんな誤解をしているのかわからないけど、私は今日映画を見に行っただんであって、至近距離で見つめ合うようなことはしていない!!と、脳内でツツこんでから、明かりの落とされた映画館での宥斗を顔を思い出して、ぽんつと小爆発を起こす。

「やっぱりなんかあった!?!」

「ないっ!?!?!?!」

ダイニングで母がゲラゲラ笑い声を上げている。

この状態の私を見て、何もなかったというのは不可能なことは分かっていたけど、おかまいなしに否定する。

近付かなければできない行為はしていないけど、至近距離には、宥斗の顔があった。綺麗な顔。思い出すとさらに顔に血が登るのを感じて、必死に脳内メモリを閉じる。しばらくはこのメモリに悩まされ続けるんだろう。幸せなことだけど。

準備を終えて、「いただきます」と声を合わせてから、二人で食べる。遅めの夕食だ。

「お肉ホロホロ!!おいしいっ。お母さんの作ったシチュー食べたかったからうれしい」

目の前のビーフシチューを食べれば、先ほどまでからかわれていたのなどすでに記憶の彼方に飛んでいってしまった。

圧力鍋でホロホロに煮られた牛スネ肉は、煮込まれたシチューと絡んで最高においしかった。

どんなに毎日夕食を作っても、母の腕にはほど遠い。やっぱり母の料理が一番だ。幸せ。

「ふふっ。たくさん食べてね。食後にタルトもあるから、その分はお腹開けておいて」

「タルトは別腹だもん」

付け合わせのシーザーサラダもむしゃむしゃ食べる。クルトンも手作りしてくれたんだろう。市販のものとは一味違う。

疲れて帰ってきたのに、私のために並べられた手の込んだ夕食が、嬉しくていつもよりたくさん食べる。

ふと、視線を感じて顔を上げると、母が微笑んで、私を見ていた。

「なあに？」

「ううん。大きくなったなあって思っただけ。ついこの間まで、ママっつて、私が見えなくなると泣いてたのに。」

慈しむような瞳の母は娘の目からみても、とても美しかった。最後の出張を終えて、思うところもあるんだろう。

「だいぶ昔の話じゃない？」

なんだか照れくさくて、笑いながら返す。

「お母さんにとっては、つい最近なの。：髪も、高校に入った頃は短かったのに、そんなに伸びたのね。毎日見てるはずなのになあ」

苦笑しながら言う母が切ない。なぜそんなに自分を責めるんだろう。後で必ずちゃんと話をしよう、と決心を新たにする。

「いつの間に長くなっちゃったなあ。そろそろ切ろうかな」

父譲りの真っ黒な私の髪は、胸下まで伸びている。

ごはんを食べる時に、ついうつかりお皿に入ってしまったりして、邪魔になることが多い。

こだわりがあって伸ばしているわけではないので、そろそろ長さを短くしたいと思っていた。

「今日麻理子ちゃんちようど休みだし、切ってもらえば？」

「んー今日はいいかな。巻いちゃってるし」

時刻は午後9時半を過ぎているが、母と宥斗のお母さんの間には、時間の概念があまりない。

休みが合った日には、ファミレスに朝方まで居座り話し込んでいる。女子高生かっ！！

宥斗の母親は美容師をしている。自分の店を持つよりも、人の下で働く方が性に合うようで、近所の美容室でもう長いこと働いている。美容師なのに、「子供たちとの時間がない！！」と言って土日休みをもぎ取った彼女は強者。

宥斗のお母さんというよりは、お姉さんと言った方がいい程若くて綺麗。さすが、あの宥斗を産んだだけある。うちの母も割と美人な部類に入るので、ふたりが並んでいると、とても子持ちの40代に

は見えない。

ふたりとも実際若いのだ。20歳の時に兄たちを産み、25歳で私と宥斗を産んでいる。43歳。

同年で、子供達ふたりも同学年。それも、下の子たちの予定日が同じ。これは運命だ！！とよくふたりで騒いでいる。

ちなみにうちの父は母と同年の43歳。宥斗のお父さんは、少し離れて49歳だ。

「麻理子ちゃん、最近紗衣に会ってないって嘆いてたよ」

「そういえば会ってないかも。平日はおばちゃん帰って来るの遅いしね」

宥斗のお母さんの働く美容師は、営業時間が少し変わっていて、昼の2時から夜10時まで。片付けをして家に帰ってくるのは11時過ぎで、私はその頃にはもう自分の家に帰っている。

宥斗が中学3年の頃までは8時には家に帰って来ていたが、高校生になるとお店の営業終了時間まで働くようになった。

「切ってもらおうかな。今度電話してみる」

「ついでに髪も染めちゃえば？もう大学合格したんだし、やっちゃえやっちゃえ！」

娘に髪を染めるようにすすめる母親。いかななものか。

うちの高校は公立で規則はないに等しい。偏差値的には上の中とい

ったところで、一般で受験に挑む子がほとんどだ。みんな今は髪を真っ黒に染めている。

「みんな受験モードだし、染めるのは卒業してからにするよ」

もう追い込みの時期。みんな遊びたいのを我慢して必死に勉強しているのに、自分だけ髪を明るくして登校するのは気がひけた。

「ゆうちゃんはまつ茶っ茶じゃないの」

「ああ、宥斗はある意味学校中に許されてる感があるからねえ…」

「なんとなくわかるけど」

言って、母が苦笑する。

「んー、やっぱり髪切るのも卒業してからにしようっ。髪切って、染めたら気分も大分晴れるだろうし」

「何か落ち込む予定でもあるの？」

不思議そうに母が訪ねる。

自ら自分の心情を暴露してしまった私は慌てて否定の言葉を並べる。

「ないよ!! ないない、全然ないです!! あ!! おかわりしてくりゅ!!」

なぜいきなり敬語。しかも最後囁んだ。しっかりしろ自分!

母の質問攻めに合わないうちにダイニングから逃げ出す。

危なかったあ…。

落ち込む予定前提な自分が悲しいけど、勝算が全くわからない以上、告白するなら宥斗を失う覚悟はしなければならぬ。

おかわりのシチューを鍋ならよそいながら、考える。

産まれた時から、いつも一緒だった。

嫌がらせにあっても、そんなことより宥斗と一緒にいたい気持ちの方が強くて、離れられなかった。

宥斗のいない生活は正直想像もできない。

それでも言わなきゃ。

失う前に気づけて本当によかった。悲しい想いも、喪失感も味わうかもしれないけど、後悔するよりは、ずっといい。

短く息を吐いて、気持ちを落ち着ける。

私にはもうひとつやらないことがあるんだ。

No. 13

なんでもない顔をしてダイニングに戻ると母は何か言いたそうにしていたが、その口から質問を浴びせられる前に、自分の口を開く。

「お母さん」

「なあに？」

サラダを口に加えながら、母の視線が私に向く。

「仕事、本当に辞めちゃうの？」

「うん。だってもう働く理由もなくなるし」

紗衣が無事に大学に合格してくれたからね。と微笑えむ。

「でも、仕事好きでしょう？」

お金のためだけに母が仕事をしていたとは思えない。

確かに毎日忙しくて大変そうだったけど、女の子のキレイを手伝うことできる素敵な仕事だと、いつも言っていた。

私のせいで、それを失って欲しくない。

「私のせいで、仕事を辞めるなら、ご飯作るのはもうやめるから…」

最後は涙声になってしまった。

涙が瞳から溢れ出さないように、必死で耐える。

泣くな。私。泣いたらお母さんが余計に気にする。

部屋着であるフリースのパジャマズボンをギュッと掴み、全身に力を込めると、母が慌てたように立ち上がって、向かい合って座っていた私の元へと飛んでくる。

「あらあら！どうして私が仕事を辞めるのが紗衣のせいだなんて思うの！？」

下を向いていた私を覗き込む母の顔は、とても困っていて、すぐにも返事をしたかったけど、今口を開いたら涙をこらえる自信がなかった。

荒い呼吸を何度か繰り返して、気持ちを静める。

「わ、私が…家のこと手伝ったから…お母さん、心苦しかったのかなって…」

「そんなことないよ！！いつもおいしいごはん作って待っててくれるの、すごい嬉しいよ！！」

母は大袈裟に言うと、力を込めてすぎて血管が浮きだっている私の拳を、そっと包んだ。

白くて綺麗な母の手。

仕事が忙しくても、家事が大変でも、自分のキレイを怠らない母の手はとても温かい。

「確かに、紗衣には本来なら私のやらなきゃいけないことを任せちゃって、申し訳なくは思ってる。高校生なんて人生で一番楽しく遊

べる時期なのに」

「私は別にそんなに遊びたいと思わない」と涙声で告げれば、「お母さんはそうだったの」と笑う。

「それも今思えば、だけどね。大人になると高校生でいられる時間は、貴重だったなあって思うの。だからそんな紗衣に、家のことをやらせるのは申し訳ないとは思ってるけど、それ以上に、紗衣が私やお父さんを心配してくれる気持ちが嬉しいんだよ」

「私の心配は、重荷じゃなかった…?」

母はかぶりを降って続ける。

「そんなことは絶対にならない。紗衣の気持ちが重荷だなんて、お母さんには有り得ない。他の人がどうだか知らないけど、私は絶対にならない。」

いよいよ涙腺が崩壊する。

もう溢れるものを抑えられなくて、嗚咽をこらして涙を流す。

泣きじゃくる私をそっと抱き締める。腕の隙間から見えた母の顔もまた、涙で歪んでいた。

「紗衣、お母さんが仕事辞める話をしてから、ずっとそんな風に思ってたの? 紗衣のせいで、私が仕事を辞めるって?」

私はもう話すことができなくて、首を縦に降ることで返事を返す。すると、私を抱き締める母の腕に力がこもる。

「本当に優しいね…紗衣は…。優しすぎて、社会渡っていけるかなになる」

「親バカだね」と笑う母に私は今度は首を横に降る。

私は優しくなんかない。

母が申し訳なさそうにしていたのをわかっていて、それでも自己満足のために家のことをやっていたのだ。

優しいんじゃない、ただの自分勝手な子供。

抱き締めていた腕をとくと、ティッシュを持って来てくれて、それから私の隣にある椅子に座る。

ティッシュ、ありがたい。

盛大に咬ませて頂こう。

そんな私を見ながら笑った母も、持ってきたそれで目元をぬぐう。

「…お母さんね、お父さんと結婚したのが、20歳の時で、入籍したらすぐお兄ちゃんがお腹にできてね。だから結婚前の2年くらいだけ働いて、すぐに家庭に入ったんだ」

初めて聞く母の話に耳を傾ける。鼻をかんだら少しすっきりして、涙も徐々に治まってきた。

「毎日幸せだね。子供がこんなにかわいいものだなんて知らなかったし、子供と遊びながら家のことをやって、お父さんの帰りを待つ、それだけなのに本当に毎日楽しくて」

幸せそうな母の笑顔がそれを何よりも物語っている。

私はテーブルの上にあるコップを手にとって一口飲み込むと、母に続きを促した。

「もちろんやりたくて始めた仕事だったけど、未練なんて全然なかった。若かったけど、遊びにでたいなんて思うこともなくて、このままずっと専業主婦でいたいって思ってたの。仕事するより、子供の傍にいたかった。そしたら今度は紗衣ができて：家を建てようって話になったのね」

「ちょっと待って」と、再度立ち上がると、デザートのはずのいちごのタルトを持ってきてくれた。

長くなるから、食べながら聞いて、ということらしい。

タルトを遠慮なくつつきだした私に母は嬉しそうな表情を見せる。

だけど残念ながら、味があまりわからない。

鼻がつまっているせいだろう。

「基礎工事も終わって、さぁローンを組むぞっていう時に、お父さんの会社が倒産しちゃったの。本当に何の前触れもなく、ね。ローンの事前審査は通ってたし、まさかそんなことになると思ってなかったから、お父さん落ち込んじゃってね。ほら、お父さんの仕事特殊じゃない？新しい仕事もなかなか見つからなくて」

うちの父は、楽器製造の仕事をしている。その中でも塗装の吹き付けをやっていて、かなり特殊な職業だ。

私が小さい頃から毎日遅くまで働いて、休みもあまりない。

なのに、「給料が全然上がらない。お母さんの方が稼いでる」と嘆いていたのを聞いたことがある。

だけど父は、その仕事をとても愛していて、家でもよく家具や自転

車の色を塗り替えたりしていた。

一度母に頼まれて、携帯の色を塗り直しているのを見た時は感動した。子供ながらに、お父さんの仕事はすごい、と思ったことを覚えている。

そんな忙しい父だったけど、休みの日は早くから起きて、いつも私き達兄妹を遊びに連れて行ってくれた。

たまに早く帰れた日にはお風呂にも一緒に入っていたし、寝かしつけてくれることも多かった。

率先して家事も手伝っていたし、休みの日に母が朝の家事を終えて疲れてうたた寝してる時などは、決して起こすことはせず、父がご飯を作ってくれた。

優しいのだ。いつもふざけたことばかり言って、母によく怒らているけど、ふたりは今でもとても仲がいい。

休みの日に母が、宥斗のお母さんと出かけてしまうと、家の隅っこでわかりやすくスねている。

高校生にもなると、父親を鬱陶しく思うらしい友人もたくさんいるけど、私は父がとても好きだ。

いくつになっても母のことが好きで堪らないらしく、いつも追っかけ回しては一喝されてしょんぼりしている。

私達兄妹にもとても優しく、基本的な躰には厳しかったけどその他のことではさく言われたことはない。

話せば、どんなに小さな話だって、大袈裟に反応して聞いてくれて、何かを頼めば必ず力になろうとしてくれる。

掘の深い、整った顔の父は最近ちょっと出てきたお腹を心配しているけど、私にとってはいつまでも自慢の「お父さん」だ。

「それで、ようやく決まった新しい仕事が、本当にお給料が安くてね。ローン払ったらもう毎月ギリギリの生活だったの。私は節約も楽しんでやっていたんだけど、紗衣が幼稚園に入るころかな。お父さん、仕事を変えるって言い出して」

責任感の強い父のことだ。

きつと、節約して自分にはお金を使わない母を見かねてそう言ったんだろう。

当時の様子が目に浮かぶ。

「私は自分の好きな事を仕事にして、それに誇りを持っているお父さんが好きだったの。だからどんなにお給料が安くても、塗装の仕事を続けて欲しかった。確かにお金を稼ぐことは大事かもしれないけど、それだけじゃないじゃない？」

「うん」と私が頷いた時には、タルトの乗っていたお皿なキレイに空っぽになっていた。

ごちそうさま。また明日も食べよう。

「紅茶飲む？」と聞かれたけど、首を横に振った。それより早く話の続きが聞きたい。

「少ないお金でやりくりするのは楽しかったし、お父さんとあなた達がいるだけで私は満たされてた。けどお父さんにはそれが辛かったのね。ちょっとした贅沢もさせてあげらなくて、悩んじゃったみたい。仕事を変えるって言い出した時、そんなことするくらいなら私が働くって、紗衣がまだ幼稚園に行ってる頃からまた働きだしたの」

母が働いていたのにはそんな理由があったんだ。

私はもう開いた口が塞がらなかった。

うちはすごく裕福ではないかもしれないけど、貧乏というほど貧相な思いをしたことはない。

それは母が働いてくれたおかげだったのか…。

「最初はねー、辛かったなあ。子供達と一緒にいられる時間が少なくなつて。特に思春期に入ると、やっぱいろいろあるでしょ？そういうの傍で支えたかったのに」

「全然できなかった」と、涙を流す母を見て、私の涙腺はまたしてもあっさり崩壊する。

「そんな…そんなことないよ。お母さんもお父さんも、いつも私達のことばかり考えてくれてたじゃない」

5つ上の兄でさえ、「俺は家族に恵まれてるな」と、いつかのお正月に酔っ払った時に話していた。

同じく酔った父はそれを聞いてわんわん泣いていた。「親父がちよっとうざいのが問題だ」と言われても、泣きながら兄に抱きついてた。母はそのことを知らないのだろうか。

「ありがとう。紗衣がそう言うてくれると気持ちが悪くなるな。でも、今はこれで良かったと思ってるの。お金がなかったら、やっぱりあなた達にしんどい思いさせたかもしれないし」

そこで、同時に鼻をかんでから、目を合わせて笑う。

お互いに鼻は真っ赤、目も真っ赤、私に至っては、つけまつげもとれて恐ろしいことになっているだろう。

「だからね、子供たちにお金がかからなくなったら、仕事を辞め
て決めてから働きに出たの。それこそ十何年も前の話。今は貯蓄
もかなりできたしね。変な話だけど、辞めるのを楽しみに頑張っ
てきたんだよ。お兄ちゃんさっさと一人暮らしはじめちゃったけど」

言いながらケラケラ笑う。

でも母は、兄が家を出る時だって何も言わなかったはずだ。
そういう人なのだ。この人は。

「まさか紗衣がそんな風に思ってるなんて、わからなかったなあ。
ごめんね。そんな風に思わせて。紗衣のせいなんかじゃないよ。だ
けど聞いてくれて良かった。ありがとう」

「う、ううん…。私もごめんね…。お母さん。ありがとう…」

何年分の涙を今日使い果たしたのだろう。

すでに目が半分も開かない。ちゃんと冷やしてから寝ないと、明日
の朝は悲惨なことになりそうだ。

自分の検討違いっぷりに、少し恥ずかしくなったけど、やっぱりち
ゃんと聞いてよかった。

もともと母が働きに出たのは、言うなれば苦汁の決断だったという
こと。

私の自己満足を、母は重荷どころか、ただ素直に喜んでくれていた。
いつも明るく楽しそうな両親にも大変な時があったのだ。 思いも
よらない話、だけどそれも、私達を父を、母が大切に思うからこそ
の出来事。

聞かなきゃわからない。家族だって、話さなければ、伝わらないことはたくさんあるのだ。

言わなくても分かるだろう、は今日限り辞めようと私は思った。ささいな事でもちゃんと話そう。母もそれを望んでくれている。

テーブルの上に山積みになれた鼻水だらけのティッシュ。

これは母と私の思い。

私はまだまだ視野の狭い子供で、それを思い知った。それから、いつでも私のことを大切に思ってくれている家族がいることを改めて認識する。

大丈夫。なにがあっても、この先どんなに悲しいことがあったとしても、私には家族がついている。

今日のことを、ずっと忘れないでいようと思った。

No. 14 (前書き)

お気に入り登録というのが100件を超えたようです。

たくさんの方に読んで頂けているみたいで、とても嬉しいです。ありがとうございます。

完結まで頑張りますのでよろしくお願いします。

No. 14

月曜日。

昨日はあれから母と夜中までいろいろな話をした。

今まで聞いたことのない話。具体的に言うと、父と母のなれそめが大部分で、後半完全にただののろけだったが、父のことを話す時の母の顔は40を超えても恋する乙女そのものだった。

出会ったふたりが気持ちを伝えあって、恋人になり、結婚して、家族になる。

それは今の私の理想そのものだった。

思わぬところで、腹を決めた自分へ追い風のような賛辞をもらえて、それが私の勇気になる。

今日、この気持ちを宥斗に伝える。

やっぱり卒業式の後にしようかな、と時々臆病な自分が顔を出す、それまでに宥斗にもし「彼女」ができたらどうするんだ！と脳内で自分同士を存分に戦わせた。

結果、臆病な自分はきれいさっぱりぶちのめして、今日この日を向かえることになった。

もう逃げない。

「幼なじみ」は今日で卒業する。

白いマフラーを首にしっかりと巻きつける。

玄関に備えつけてある鏡の前に立てば、いつもと同じ自分がいた。

泣くか笑うか。

一世一代の大勝負。

ローファアのつま先を鳴らしてから、思い切りドアを開ける。

「いってきます！」

冬晴れの青い空の元、私は確固たる決意を持って、歩みを進めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3881z/>

「幼なじみ」

2011年12月20日16時55分発行